

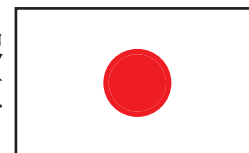
パイプオルガンは、近郊の町フロートーのグスタフ・シュタインマン社で1968年に作られる。三段の鍵盤と40の音栓で響きを創出できる。さらに祭壇の方には小型パイプオルガンもある。オルガン横の壁には、レムゴ出身の日本研究家エンゲルベルト・ケンペルを顕彰した碑がある。カロリン・エンゲルス作。ケンペルは教会脇の元牧師館（現信者会館）で生まれる。亡骸（なきがら）は、この碑のそばに埋葬されている。もうひとつの碑（北西の柱）は、1647年から1665年まで当教会の牧師であったアンドレアス・コッホを記念するもので1999年レムゴ市のドルステン・ディークマンの作である。17世紀にはレムゴで209人も女性と男性が魔女狩り裁判にかけられ殺された。アンドレアス・コッホは、レムゴで魔女狩りの迫害にあった人々の側に立ち尽力するが、そのことで彼自身が有罪の判決を受けることになる。火あぶりの刑が普通のところ恩赦を受け、剣（つるぎ）による死刑となる。

2006年から2011年まで教会とその広場は4,500,000ユーロをかけて修復された。一番の難関は、以前から塔が身廊から傾いてきていたことで、基礎固めをせざるを得なかったことである。内部にもかなりの手を入れ新装もされた。パーペンシュトラーセ通りと南の塔との間の広場には2011年にルターの木と呼ばれるりんごの木が植樹される。「もし明日世界が滅びるならば、今日小さなりんごの木を植えるであろう」と言ったマルティン・ルターを思い起こすために植えられたものである。さらに教会の外の北壁には、この地が13世紀から1820年までレムゴ旧市街の墓地であったことを記憶にとどめる意味で、ドルステン・ディークマン作『望みの石柱』が建てられる（2012年）。その台座には、『救い主が生きておられることを知っています』ヨブ19,25とある。

以上僅かなご案内となりましたが、もっと興味がおありの方にはDKV芸術案内No.396/2をお勧めします。美しい写真入りで30ページの小冊子です。入口で購入されるか（3ユーロ）、<https://nicolai-lemgo.de> ㊦ご注文ください。

では楽しいひとときを過ごされますよう。

翻訳
松本ベンケルベルク秀子
レムゴ



レムゴの聖ニコライ教会へようこそ

この教会は、およそ800年前に建立される。礎（いしずえ）は1200年頃とされている。50年もの歳月をかけて完成の日の目を見たロマネスク様式の教会は、筑後30年はそのままであったが、後に市民は当時の潮流に習ってモダンなゴシック様式の教会を望むようになり、そこで古い側廊を取り壊し、幅が広くてもっと丈の高い会堂にすることを決議する。ここに常設市場のような形に端を発する、いわゆるハレンキルヒエ会堂の誕生となる。塔の部分には現在もロマネスク様式が見られ、そこには幅が狭く丈の低い側廊の残りも見られる。

東の方はゴシック様式が主流となる。この部分には、ほぼ10年の年月が費やされる。内陣は、もっと大きくする筈だったが、1375年にはじまったペストの流行で、それどころではなくなる。船乗りと行商人の守護聖人である聖ニコラウスが当教会の守護聖人である。レムゴのようなハンザ同盟の町では、最初の教会はこの守護聖人に捧げるのが当時の習わしである。

二つの塔に両側を守られて立つこの教会は、南の塔のみが教会の所有である。塔には快い響きの青銅の鐘がかかっている。戦（いくさ）の折、塔の内部に鐘を運び出せる穴がなかったお陰で、鋼（はがね）の鐘に変えられる憂き目に遭うこともなく今に到っている。多分、塔の下部で鑄造され上部へ引っ張り上げられたのだろう。

南の塔は、1663年になると当時のはやりであったうねりのある小円蓋をかぶせられる。というのもその3年前、古い蓋は大旋風トーネードにより吹き飛ばされてしまっていたためである。片や北の塔は町の所有物で1854年までは、そこから番人が、町を見張っていたものだ。1936年からは二時間毎に快い響きの鐘の音が聞こえてくる。市庁舎内の鍵盤

台からでも弾けるとのこと。

1533年、宗教改革を受け入れ、ルター派となったレムゴ市民ではあるが、1605年に領主シモン六世がカルヴァン派に改宗した際、当然領民も同じ宗派に改めてくれると思いきや、レムゴ市民はその後ルター派のままであった。その恨みを晴らすがごとく領主は治世の地をレムゴから隣町デトモルトに移す。

宗教改革の波は、教会内の芸術品破壊という形ででも現れている。タベルナクルムの様々の彫像を破壊してまわり、一番高いところにあったペリカン像がひとつ被害を受けずに残る。燭台上方の1280年製の婦人像も手でもぎとられ叩きこわされる。

こういう事情で宗教改革以前の芸術作品は僅かしか残っていない。燭台上方の壁に埋め込まれている1280年製の祭壇背後の飾壁は、そのひとつである。東と南側の壁面の1380年ごろのフレスコ画も難をのがれる。東の壁には左に年長者ヤコブとヨハネ、右にはパウロとペテロが描かれている。円の中の「+」の印は奉納の十字を意味する。南の壁にはヤコブとヨハネ、バルトロメオとトーマスが見られる。

内陣の入口の大きなキリストの十字架は宗教改革前のものだ。北正面入口の向かいのクリストフォロス像はほぼ1300年ごろのものとされるが、これを仰ぎ見、十字を切ったならその者はその日一日、神のお恵みがいただけるとのこと。

宗教改革後は、ヴェーザー河流域独自のいわゆるヴェーザールネサンス様式の芸術が生まれる。洗礼盤一式は1597年、レムゴの芸術家ゲオルク・クロスマンの手になる。1600年作、上のかぶせ天井は1630年ごろの作である。

1587年作の、騎兵大尉モーリッツ・フォン・ドノップの墓碑銘も同じくゲオルク・クロスマンの作だ。内容は年長者ルーカス・クラナッハの木版画にまでさかのぼる：一本の木の枝の左半分は枯れてしまっているのに右側は、青々としたままで絵を二分している。左はモーゼが十字架上の蛇と一緒にいる光景（モーゼ4、21）。右はエルサレムで磔（はりつけ）にされたキリストの下で祈っている寄進者（未亡人と死者

の兄弟）である。枯れた木の方にとまっているオウムは（オウムはマリアを象徴するものだが）寄進者はルター派プロテスタントであり、聖母マリア（カトリック）に拠るものではないことを示している。文面は最後の審判を表している。

レムゴの彫刻家ヘルマン・フォスは1643年に本祭壇を創作する。彼は例の30年戦争の際、仲間の番人とともに市壁の塔で見張りをしていた人物だが、こともあろうに全員が寝入ってしまい、そのためにスウェーデン部隊に乱入され、町は略奪の憂き目に遭う。スウェーデン部隊退却後、見張り要員たちは罰を受けることとなる。だが、かのヘルマン・フォスは逃亡に成功する。数年後、レムゴの父の家を維持したいがために、市の評議会に陳情の意を示したところ恩寵（おんちよう）を賜る。罪滅ぼしの証に無償で聖ニコライ教会に祭壇を彫刻すると申し出たところ、市はこの申し入れを受け入れる。この祭壇に付随の絵はベーレント・ヴォルテマーテの作である。パンとワインによる聖餐式（せいさんしき）はルター派の伝統による。

教会内で一番古い窓は、1863年に古い窓の残りを集めて作られたもので紋章付きの寄進者らの名前が見られる。

大方の窓は1922年から1924年にかけてハノーヴァーの芸術家フランツ・ラウターバッハが後期ユーゲントシュティール様式で創作した。内陣の三枚の窓はヨハネ黙示録の場面である。恵みをたれるキリストを示した東側の窓も彼の作になる。南側の中ほどに位置する窓は1965年マールブルクのエルハルド・クロンク作で、使徒と予言者とともに『捧げ物』に関するテーマも掲げられている。西側一連の窓は1992年レーバークーゼンのパウル・ヴァイクマン製作。下部の六組の窓は混乱した無秩序の世界をゆがんだ正方形で表し、上部の三組は精神世界に属するもので、秩序が保たれているので、まともな正方形になっている。

1991年から当教会は世界平和と和解を象徴するドイツ釘十字架連合に属している。その印としてオルガンの前の柱に祈りのことばとともに釘十字架が掲げられている。